菌の名は。Fungus name.

波部 健

例会では多くのきのこが同定会場に並ぶが、正確に名前がつけられず単に「〜属」で終わっているものもある。吹春さんのような人でも名前がわかならいきのこがあるのだ（吹春さんだから適当につけないということもあるが）。

日本国内ではおよそ１万種類のきのこがあるといわれるが、そのうち名前がついているのは３千種ほどしかないという。「名前がついていない」というのはちゃんと種として記載されていないために学名もついていないということ。どこかできのこを３種類見つけたら、そのうち２種類は名前がない可能性もある。

図鑑にも掲載されていて有名なマントカラカサタケ。ヤマケイの「日本のきのこ」では学名を「*Macrolepiota* sp.（カラカサタケ属の一種）」としていたが、2011 年発売の増補改訂新版では *M. detersa* で掲載された。この学名は 2010 年になってつけられた（新種記載された）。

同じように、わりとよく見かけるのに学名（または和名）がなく、単なる仮称で呼ばれているきのこが多くある。

フリルイグチ（仮称）

雑木林で見かける中型のイグチ。カサはピンクを帯びて微細なひび割れがあり、黄色い管孔を傷つけると青変性がある。カサの周辺部が波打つことが多く、それが名前の由来になっている。主に西日本に分布していると思われる。

フリルイグチ

キナコハツ（仮称）

ウコンハツ（*Russula flavida*）と混同されることもあるが、全体的にベースは白色で、カサ表面や柄の根元に黄色い粉状のものがついている。これについては *R. ballouii* と

いう学名があるにもかかわらず、和名は仮称扱い。書籍によっては「ウコンクサハツ」で掲載されていることもある。学名があるのに和名が仮称扱いとはどういうことか？学名は国際命名規約に基づいて記載されなければならないが、和名に関しては特にルールがない。強いて言えば図鑑に掲載されている、広く認知されているのが「標準和名」とされる。不明種が最初に海外で新種記載されたのなら和名がなくてもおかしくないが、その後日本国内にも分布していることがわかったものは「日本新産種」として報告される。このとき新たな和名を提唱すればすっきりするのかもしれない。

キナコハツ

ハマクサギタマゴタケ（仮称）

雑木林に発生する大型のテングタケ属。全体が白っぽく、カサの周囲に溝線がある。柄にはツバがあり、根元のツボは大型で厚く、二重になっている。植物のハマクサギのような臭気があるのが名前の由来だそうだが、正直よくわからない。どこにでもあるわけではないが、そんなにレアなものでなく、これほど目立つきのこであるにもかかわらず、きちんと記載されていない。マントカラカサタケと同じかもしれない。

ハマクサギタマゴタケ

ジムチョウハツ（仮称）

コナラ林などに発生する大型のチチタケ属。全体がオレンジピンクでカサ表面に環紋があり、切ると乳液が出るが変色性はない。９月の例会では毎年たくさん見られるが、同定会では「チチタケ属の一種」と書かれている。ジムチョウハツというのは、会員さんの知人の事務長さんにちなんでいるそうだが、一部だけで通用しているニックネームである。このきのこは青木実の「日本きのこ図版」に掲載されている「アイバカラハツモドキ」ではないかと言われているがそれも仮称である。これについて調べた人が新たに「カキイロハツ」という名称を検討しているそうだが、記載されればシンプルでよい名前になる

ジムチョウハツ

と思われる。最近新たに名前が付けられるものには形容詞の多い長い名前になることが多いが、シンプルな名前は好感が持てる。

キアシヤマドリタケ（仮称）

雑木林に発生し、カサは表面がビロード状で黄褐色～茶褐色。柄は黄色で網目がある。管孔は当初白い菌糸で覆われており、こうした特徴から黄色いヤマドリタケモドキといった風情がある。この名前も仮称であり、「アミアシコガネヤマドリ」など異なる名称で呼ばれることもある。これも *Boletus auripes* という学名がついている。おもしろいことにこの学名は当初コガネヤマドリのものであったが、こちらは現在 *B. aurantiosplendens* となっている。

キアシヤマドリタケ

ティラミステングタケ（仮称）

2015 年の会報でも紹介したが、カシ林などに発生するテングタケ属で、カサ表面が暗褐色の粉末に覆われ、縁には内被膜の名残と思われる白いフリンジがついている。柄は灰色の地に白い綿埃状のものが付着し、柄の上部に白いツバもしくはその痕跡が残っていることがある。根本はやや丸くふくらみ、先端が細くなって地下に続いている。このカサ表面の粉のかんじがココアパウダーをまぶしたティラミスに似ており、実物を見れば納得できるネーミングである。

似ているものにコナカブリテングタケ（*Amanita griseofarinosa*）があるが、カサ表面全体が灰色の綿埃をかぶったようになっている、柄やカサの縁の白いツバもしくはその痕跡がない、という点が異なる。現在のところニセクロハツのように東海地域よりも西に分布する種類の可能性がある。

これについては新種ではなく、海外で記載された *A. vestita* の可能性がある。

ティラミステングタケ

アワタケ属の一種？

昨年７月に京都のシイ林で見つけた。全体が単褐色でカサ表面は細かくひび割れ、黄色い管孔は大きくて多角形。切るとまずは管孔が青変したが、やがてカサや柄の肉が真っ赤に変色し

アワタケ属の一種？

た。このようなイグチははじめて見たもので見当がつかないため、長野県在住のイグチを研究している人に標本を送った。

ミツイロベニタケ（仮称）

７～10 月にシイ林やコナラ林に発生するベニタケで、カサは黄色、赤紫、灰緑の３色で構成されることが多く、アイタケに似ていてカサが緑と赤の２色になるフタイロベニタケがあるのだからこれは「三色」だろう、ということで自分がつけた仮称。ときに赤紫もしくは灰緑が主体となる場合もあるが、中心部付近に黄色が入ることが多い。ぬれると粘性が出る。柄は白色をベースにピンクや黄色が入ることが多く、表面はしっかりした肉質だが、内部は髄質で柔らかく切ると押した方向に偏る。ヒダは密で黄白色。傷つけるとまず赤くなってから、やがて黒くなる。きのこ全体も古くなると黒ずんでくる。

このきのこを最初に認識したのは 2007 年で、仙台で目撃したものが印象に残っていた。そして 2009 年に京都で発生しているのを見つけ、標本を持ち帰って撮影し、特徴を記録した。同じきのこがネット上でも複数アップされており、西は長崎県から東は福島県まで発生している。

これとよく似たきのこを本郷次雄がスケッチしたものが残っており、名前がついていないことから新種の可能性がある。もし、新種記載するならどんな名前がいいのか？色彩からすると *R. tricorol* というのがよさそうだが、その学名はすでに存在している。菌学者にちなんでつけられることもあるため *R. hongoi* というのもよさそうだが、その名前も存在する。学名は属名と種小名の組み合わせで同一の名前はつけられないのでよく考えなければならない。

これだけ周囲に不明種があふれているきのこは動植物より誰もが新種を発見できる可能性が高いといえる。でも、顕微鏡を持っていないという人でも、新種発見に貢献できることがある。どこかでわからないきのこを見つけた場合、発生場所、日時、発見者、肉眼的に観察できる特徴を記録して、研究している人に標本を送ることでその標本をもとに記載されるかもしれない。

ミツイロベニタケ（仮称）

切ると赤くなってから黒変する。古くなると黒ずんできて、触ったところも変色する。

きのこを追いかける人間の夢としてひとつくらい自分で新種に名前をつけたいものだが、前述の「ティラミステングタケ」を日

本新産種として、「ミツイロベニタケ」を新種として記載するというのを目標としたい。

新種の場合、以前はラテン語で記載しなければならなったが、現在は英語でよいことになっている。多少はハードルが下がったものの、簡単なことではない。まずは新産種報告からはじめるべきか。

新種や新産種に新しい名前をつけるとき、菌学会では和名のガイドラインというのを作っている。あんまり突飛な名前をつけるなということなのだろうが、最近、新種のカニに「ペタンココユビピンノ」なんてかわいい名前がつけられたように、きのこでも「ポッチャリシメジ」とか「モフモフタケ」なんて名前があってもおもしろいなあと思う（地下生菌識別図鑑に掲載されている仮称マッチャガスターなんてすばらしいと思う）。

❐

［図書紹介］

■小学館の図鑑ＮＥＯ（ネオ）『きのこ』 DVD つき［改訂版］

写真：大作晃一、監修・執筆：保坂健太郎 ほか、発行所：小学館、2017 年 11 月 27 日、159 頁、2000 円＋税
ISBN：978-4-09-217322-4

人気のＮＥＯ図鑑シリーズ。大型ハードカバーの中身は大作さんの美麗な白バック写真や生態写真、親しみやすい解説や挿絵を用い、最新の DNA 分類に基づいた掲載順に日本に発生するきのこ約 700 種が掲載されている。ミニコラムなど、豆知識もたくさん織り込まれ、きのこをよく知っている大人も、これから勉強する人にも、読んでも眺めても楽しい一冊である。付属の DVD「ドラえもん・のび太のびっくりきのこ」では、カラマツ林やブナ林など、異なる林ごとにきのこを探す感覚が楽しめる。子どもたちには苦手のカバーは、おそらくはずして使われるだろうことから、壁にはって楽しめるポスターになっている。白いきのこから黄、赤を経て黒いきのこへのグラデーションが美しい。

じつはこの図鑑、同年 6 月 23 日に発行されたのであるが、‘ヒョウモンクロシメジ’に記載の食毒表記が間違っていたということが発覚。万全を期すということから、出版社が回収・交換を行ったことでも知られる。［改訂版］では、主に国や地域、または文献によって食・毒の見解が分かれるきのこを中心に、補足説明が追加されて充実、巻頭に監修者からのメッセージも掲載され、パワーアップしてもどってきた。購入するときには、表紙に［改訂版］と書いてあることを確認してください。㈫